

福井俊彦先生のご逝去を悼む

川尻 秋生



もと本学の教授であり、本会の会員でもあった福井俊彦先生が、昨年二月二五日、心筋梗塞により逝去された。享年七八歳。

福井先生の「正史」については、すでに新川登亀男先生が『日本歴史』七四八号（二〇一三年九月）の「学会消息」欄に記しておられるので、ここでは「野史」として、教え子の一人である私から見た先生のお人柄について述べることにしたい。

私は大学三年から修士二年まで（一九八二年四月～八六年三月）教えをいただいた。もともとは考古学を専攻するつもりで早稲田に進学したが、先生による三年時の『続日本紀』講読の演習が性にあったので、卒論題目提出日の前日に古代史（文献史学）に転向した。当時、まだ考古学専修はなく、日本史専修のなかに含まれていた。ので可能であった。

古代史の教員は水野佑先生と福井先生のお二人であった。水野先生は定年間近で校内のお仕事も繁忙であったため、学生の指導は、もっぱら福井先生が担当されていた。当時、正規の授業のほか、先生と大学院生、それに学部学生による「まほろばの会」という自主ゼミが毎週あり、古代史で卒論を提出しようとする学生は、ほとんど全員出席して文献講読の手ほどきを受けた。今では考えられないことである。その会は厳しく、立ち往生することもしばしば、毎週木曜日の四時限近く

になると、体調の不調を訴える学生もいたほどである。しかし、会終了後のお茶の時間は和気あいあいと楽しく、また、夏には高野山から南紀を巡検したことも懐かしい思い出である。先生は、学生指導に精魂を傾けられたと思う。

私は大学院を二年間で修了し、すぐ博物館に勤務することになったので、論文の書き方も知らなかった。しかし、「論文を書かない者は研究者ではない」、だから「論文を出すなら添削してあげる」という先生の言葉に支えられて、三〇歳過ぎまで草稿に「赤」を入れていただいた。ところが、ある時、博物館の封筒でお送りしたところ、「職場の封筒を私事に使うとは何事か」と厳しく叱責され、平伏したこともある。こと、公私の分別には厳格であられた。

福井先生は一本気のところが、あるいは誤解を生じたことがあったのかもしれないが、小生にとってはかけがえのない師であった。後年、学部改編のあおりを受け、体調を崩して選択定年を迎えられたことは、誠に残念なことであった。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げる。